



## 気持ちを新たに

宮本 文穂（山口大学名誉教授）

### 1. はじめに

私は、阪神淡路大震災直後の1995年4月に神戸大学工学部から山口大学工学部へ転任し、65歳定年までの20年間は山口県宇部市で過ごしました。定年後は、フィンランドとスイスに1年余滞在する機会を得た後、芦屋市に住居（終の棲家）を移して現在に至っています。20年間の空白は大きく、関西地域の親しい友人もほぼ同様に定年を迎えており、また、震災前の街並みはどこも激変したと言っても過言ではなく、まさに“浦島太郎”状態でした。この状態は、コロナ禍の影響も相まって約10年が経過した現在でもあまり変わっていません。すなわち、関西地方での会合、委員会、イベントなどに以前のように頻繁に声がかからなくなっています。現在でも宇部で設立した研究会、山口県アドバイザー、中国地方整備局連携など、中国地方でのボランティア的な活動が中心となっています。

このような状況の中で、昨年12月7日に大阪市で開催されたCVV市民見学会および懇親会への参加を誘っていただいたのを機に、本年（2026年）1月に開催された定例会で本会入会が認められ、（後期高齢者の範疇に入っていますが）久しぶりに初々しい新入会員の気分を味わっています。

ここでは、新入会員に与えられた自由な紹介原稿依頼を得た機会に、定年後に私の気持ちを新たにさせてくれた体験談、エピソードなどを紹介したいと思います。

### 2. プロローグ

1995年の山口大学への赴任当初、国際会議などに参加すると山口、宇部の知名度の低さを思い知らされ、宇部市での国際会議開催、宇部への外国人研究者の長期・短期招へいなどによる積極的広報を心がけました。その際、国際会議の進行では、1題当たりの発表、討議時間に比較的余裕（30～40分程度）を持たせ、会議終了後には地元の方々の協力を得て宇部の特徴を出した心に残るレセプション、バンケットの演出と我が家（日本の家庭）での“おもてなし”でさらに印象付けるようにしました。図1は、海外からの訪問者を交えた我が家での“おもてなし”の様子を示した一例です。また、会議最終日には山口県内外の有名な橋梁ツアーを企画して、日本の橋梁設計、架設、維持管理技術の高さをアピールするとともに、山口名物の“錦帯橋”（木橋、5スパンアーチ橋）と関連清酒である“五橋”をセットで宣伝し、宇部、山口滞在が完璧に記憶に残るように心がけました。図2は、その一コマを清酒“五橋”とともに写したものです。

このような交流を通して大変興味を持った二つの国があります：

一つは、知り合いの多くが“シャイで寡黙”なフィンランド国で、一般的情報として“子供の学力が世界一位。大学を含めた子供の教育費および国民の医療費が全て無料、ただし、税金・物価は高い。国民の幸福度、満足感が高く、常に住んでみたい国の上位”；**疑問！**なぜこのようなユートピアのような国が成り立つのか？

もう一つは、気品高く多言語（国民の多く（特に知識人）は3か国語以上を自由に話す）を駆使して情熱的に自己主張をするスイス国で、教科書的情報として“永世中立の立場を堅持する世界唯一の国。周りに海が無いのに日本との友好関係が150年以上続いている”；疑問！どうすれば永世中立国は実現可能なのか？

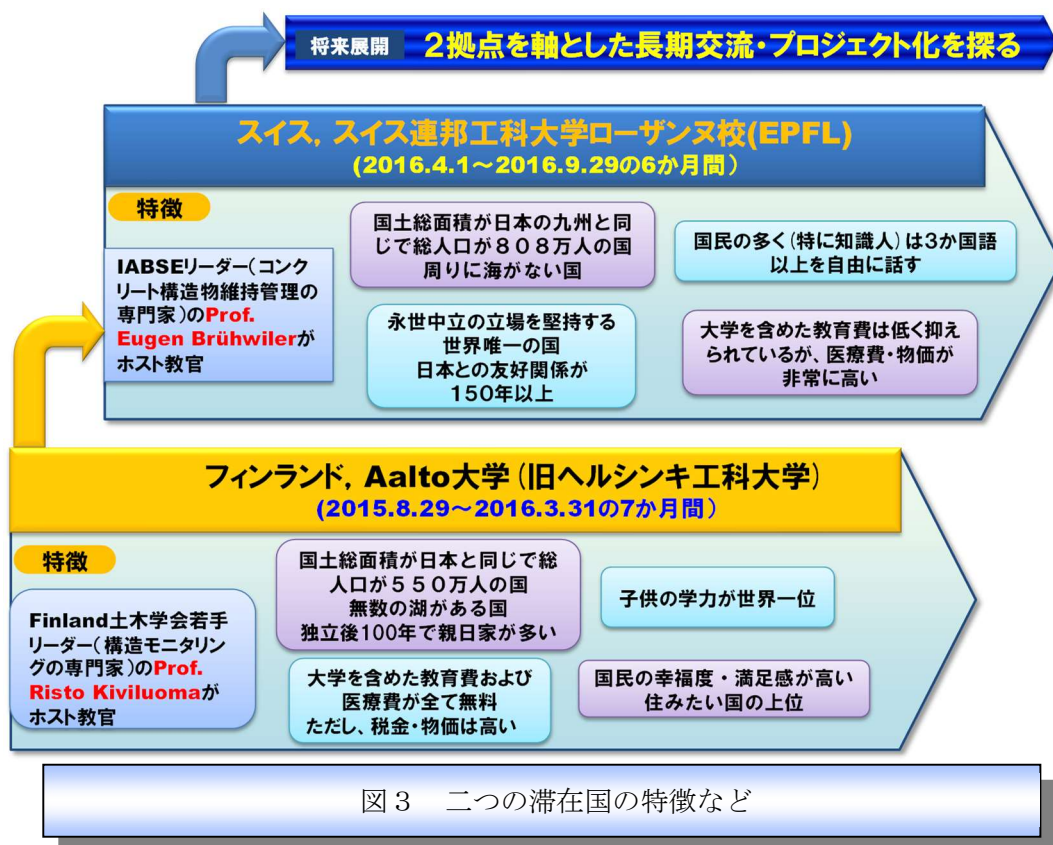
以下では、上述のような観点から定年後に両国に夫婦で滞在し、多くの家庭に招いて頂いた結果、大きな感動を覚えるとともに新たな夢と希望のようなものを与えてくれた具体的体験談などを紹介してみたいと思います。なお、今回の2つの滞在国の具体的な特徴などを図3にまとめています。



図1 海外からの訪問者を交えた我が家での”おもてなし”



図2 国際会議での山口名物”錦帯橋”と清酒”五橋”の紹介



### 3. フィンランド事情見聞

フィンランドは国土の総面積が日本とほぼ同じですが、総人口は約 550 万人で日本の約 1/20、ムーミン一家、サンタクロースなどが暮らす自然と湖の多い国です。国民の多くは 100 年超前のフィンランド独立時の歴史的背景から親日家が多いと言われます。独立後は苦難が多かったようですが、前述したように、現状は皆が憧れるような国家を実現しています。一般に人々は“シャイで寡黙”でサウナが大好きであり、私たち日本人にとっては非常に親しみの持てる国民性があると考えます。

フィンランドでは、男女を問わず全国民が仕事を持つというのが一般的で“扶養”という概念が理解できないようでした。また、結婚に至るプロセスも多様な形態があり、カップルの間に子供が出来ても結婚の有無に関係(不利)なく安心して子育てができる環境が整っていると感じられました。すなわち、連続3年程度の長い育児休暇の保証と赤ん坊誕生直後からの両家のおじいちゃん、おばあちゃんが頻繁に育児に加わるのが普通のようなようでした。さらに、地域社会には幼児から小学生くらいまでを24時間預けられるような公共、民間施設が十分あるようで、安心してフルタイムの仕事、家事などに専念できるようでした。

このようなシステムが無理なく回るには労働環境(基本的に残業しない、年休取得率100%が普通、夏休みおよび冬休みは週間単位で長い)が整っていることが必要となります。フィンランドでは、このような環境が広く浸透しており、しかも社会構造がほぼフラットで個人個人が基本で繋がっており、会社での上司と部下の関係、大学での教授と学生の関係などいたるところでほぼ対等な個人同士の関係が成立しているように見えました。



フィンランドの子育てには大変興味があり、いろんな例を聞かせてもらいました。基本的には両親が上手く連携して子育てをし、学校への送り迎えのみならずいろいろな行事、遊び、旅行を通じて我が子の興味、得意分野を見出そうとしているようでした。基本的に競争社会ではないようで、成長の評価は我が子の過去の成績からの伸長に基づいていると言っていました。得意分野を見出してほめる子育ては、“子どもの学力が世界一位”になれる近道と納得できました。また、大学までの教育費が基本無料、国民医療費がすべて無料の実情を考えると、背後には種々の問題があるにしても、極端に言えば子供のための貯蓄、老後の貯えが一切不要となり、夫婦二人分の給料で人生を何の心配もなく楽しむことが可能となります。国民の80%近くが“自分は幸せに生きている”と感じるとの回答に納得できます。

フィンランド人は、長い夏季休暇を過ごすために自宅から離れた湖のほとりにサウナ付きサマーコテージを自身で建てて家族で代々所有するのが一般的で、長く親しく付き合っていると招待してくれる場合があります。皆で暑いサウナに入り冷たい湖で泳いだ後、日の暮れない屋外でバーベキューを楽しんだり、近くの森でブルーベリーやキノコ狩りなどをしながら何気ない会話をしていると、家族の一員となったように感じられ素の自分に戻れる気分になります。非常に良い習慣と考えます。

また、フィンランド人は、非常に頑固な面があり、研究上でどんなに困難な問題でも他の人に聞くことなしに何でも自分でやろうとする人が多いと感じています。わからないことは教えてもらうのが近道と考える私には理解できない面であり、反省すべき気づき点でもあります。

最後に、フィンランドでは、国民の知る権利が保障されており多様な情報公開がなされています。例えば、フィンランドには、現在4基の原子力発電所が稼働していますが、その発電量、余剰電力の他国への販売状況がオンライン検索可能、自身の納税額、将来の年金額が公開されているようで、これを参考にいつまで働くか（定年退職年）を決定することが可能など、いくつかの例を教えてくださいました。この基本的考え方は、自己責任意識の高さと政治家への信頼が厚いことが基になっていることが挙げられます。

図4は、家屋、家具、サウナなどほぼ全てのものを長い休暇を利用して自らの手で造作、作製した自慢の室内と真冬午後の窓からの風景です。また、サマーコテージでの会食、団らんの様子を図5に示しています。

#### 4. スイス事情見聞

スイスは国土の総面積が日本の九州とほぼ同じで、総人口は約808万人、周りに海の無いヨーロッパのほぼ中央に位置し、政治・軍事面で永世中立の立場を堅持する世界唯一の国です。そのため、国境を接する国々と多言語で鋭く、微妙な交渉をする必要があることが想像できます。滞在中のある時、ローザンヌからチューリヒに鉄道を利用して移動した折に、首都であるベルン(Bern)手前で車内放送が何の前触れもなく突然フランス語からドイツ語に変わり驚きましたが、スイス人の友人は平然としていたのを思い出します（もちろん英語での放送はありますが）。

スイスと聞いて一番に思い浮かべるのは、歴史書で習った唯一の“永世中立国”です。これはスイス政府が“我が国は永遠に中立です”と世界に宣言して実現するものではなく、歴史的に長い苦難があつて世界から認められたと理解しています。有名なものとしては、古くは、敵対する2国間の紛争に勇猛果敢な“傭兵”を送って自国には攻めてこないようにする。また近年では、



図4 ユヴァスキュラにある友人宅(全て自作)での食事風景と典型的な真冬の窓からの風景



図5 森の中にある湖畔に立つサマーコテージでの食事風景

オリンピック本部など多くの平和的な国際機関の誘致、世界中から信頼と預金の集まるスイスの銀行など、永世中立が保てるように熟慮した涙ぐましい努力が随所に見られます。しかし、その背後には、至る所にある弾薬庫、強大な軍事力、国民全員が入れるような巨大な地下空間（シェルター）が多くの国民の支持のもとで保持されているようです。

滞在中に一度、何かの折に国の“主権”の話が出て“sovereignty”という単語が聞き取れないばかりか意味さえも分からないという大恥をかいたことが思い出されます。日本では国の主権の内容、範囲が議論されることは私の知る限りではほとんどありませんが、スイスではよく議論の場に出され、皆一家言を持っており意識は高いということでした。ちなみに、友人の意見は、日本はアメリカの属国で主権がないようなことを言っていました。なんとも情けない限りです！！

もう一つ印象に残る話題として健康保険の話になった時に、スイスでは健康保険は個人の責任で毎年契約を更新するもので、その年の健康状態と経済的なことを考慮し、どの保険項目を“購入”するかを決めなければならないと話していました。そのうち、話が私の方に回ってきてお前はどのようにしているのかを問われました。日本は、国民皆保険制度を誇っており、ほとんど無意識に自動天引きされているようなことを答えると、なんとなく日本の皆保険システムを既に知っているようで、それ以上の議論にはなりませんでした。

マッターホルンに代表される雄大なヨーロッパアルプスの山々を仰ぎ見たり近くまで登ったりしていると、日頃のあくせくした生活がちっぽけな営みに思えるようになりますが、ちょうど私



たちが滞在していた時期にアルプスの裾を掘り抜いてイタリアへ至る“ゴッダードベーストンネル（鉄道）”（57.1km）が開通し、日本の青函トンネル（53.85km）を抜いて世界一長いトンネルとなったと友人が誇らしげに話してくれました。日本の長大橋、長大トンネルが次々と世界一の座を譲っていくのを聞くのは悔しい限りです。何とか大きな夢を語りたいものです！！

最後に、一昨年（2023）年11月にスイス連邦工科大学ローザンヌ校（EPFL）を定年退職した友人の話によると、彼の大学では教授は定年10年前になると、これまでの研究成果を社会で実用化することを考えて私的なコンサルタント会社を設立するのが一般的で、彼の場合、設立1年目で大学業務と会社の仕事の比率を9：1にする。その後この比率を毎年1ずつ変化させて、最終年の10年後には0：10で定年を迎える計画であると言ってその通りに実行したようです。有言実行の典型例です！！

友人が定年までに実用化した超高性能繊維補強コンクリート（UHPFRC）と有名なシオン高架橋床版の補修・補強への適用例を図6および図7に示します。



図6 研究室前に展示されていたUHPFRC製アーチ模型（日本の折り紙の原理を利用）



図7 UHPFRCを床版の補修・補強に適用した有名なシオン高架橋の現状外観

## 5. あとがき

上記のような余りまとまりのない体験談となりましたが、定年後に新たに入会させて頂いたCVVでの活動参加にあたっての気分一新、新たな目標と希望が持てそうな経験をまとめてみました。あと何年健康寿命があるかわからない年齢に達していますが、これからのCVV活動、特に若手人材の育成、技術伝承に少しでも寄与したいと考えていますのでよろしくお願いします。

（2026年1月 記す）